

和辻哲郎

私の根本の考

私の根本の考

一

西洋の哲学を通観すると、極ごくく大体に云って、ギリシア哲学に於ては自然、客体、森羅万象の有り方が問題にせられ、主体を問題にしていけないのに対して、近代の哲学は主体の側へ眼を移したと云えようかと思う。その場合主体自体がどういふものであるかということの問題にするのではなくて、自然とか客体とかが成立する根本条

件として主体が前提されるのであって、この思想はカン
トに於て頂点に達する。デカルトが「我思う、故に我在
り」から出発したのも、自我意識の基礎の上で、客体が
如何に成立してくるかという点に関心が置かれている。
その点はイギリスに於ても同様であるのみならず、寧ろ
イギリスの方が進歩が先でもあり、顕著でもあって、ロ
ック、ヒューム等に於ては総てが観念になる。こうして
哲学は、常識の自然的立場と全く異なるに到っている。常
識の立場では、自分と離れて対象が存在し、それをこち
らから鏡のように写し取るのであるが、それに対して、

近代の哲学は、意識がなければ対象はないという考え方を
をする。つまり自我が中心の問題なのであって、それと
共に、倫理学もすべてそうなってくる。

ところで、カントに於てはつきりしてきたことは、問
題にしている主体は、一切の客体の世界の成立根拠にな
っているが、それ自身は認識の対象にならない、把握出
来ないということである。対象にした自我は、客体―自
我になっってしまう。しかし倫理学の問題では、どうして
も認識されないその自我が、いろんな行動をしたり、働
いたりするのであるから、それを問題とせざるを得ない。

カントは第一批判に於て、対象成立の地盤を、主体の内
に、範疇の内に見出だしたのであるから、主体が範疇を
包むのであって、逆に範疇によつて主体を捉えることは
出来ない。しかし実践哲学に於ては、その主体が、本体
(*Noumenon*) という形而上的なものとして問題にされ
てくる。主体の存在は、日常、我々が実践している時は、
極く身近かな事柄なのであるが、認識の問題としては実
に面倒なのである。カントでもそれがうまく行っている
とはいえない。特に、自我の存在は明証的であるにして
も、他我の存在は論証が出来ない。カントはそのことを

「哲学のスキャンダル」と呼んでいるが、カント以後でも事情は同じである。

リップスは二十世紀の初めに、感情移入説をとなえ、例えば、他人が笑っている時、その筋肉の動きを通じて、そこへ自分の感情を感じ込むといった考え方で、自他の交渉を説明したが、この場合、結局、総てが自我の体験しまになつて了う。

マックス・シェラーは、デカルトは我思う、ということから、自我の明証をつかんだが、他我に就いても、*Du-Evidenz* がある、他我は初めから明証的なもので、

あとからは、論証出来ないと考えた。戦前のドイツ現象学は、簡単に云えば、個人意識の立場で、カントと同じ問題を解決しようとしているのであるが、そこでも他我の問題、間―主体性の問題が、厄介な問題として残る。結局に於て、自我、個人意識を根本に置くのが、近代哲学の難点であつて、経済学に於ける、欲望の主体という概念に就いても同様のことが云えると思う。

主体は確に自我であるが、それは同時に他人の自我でもある。無数の自我が勘定の内に入って来なくては、主体の問題は解決されない。カントが、主体は本体であつて、そこには範疇があてはまらないと考えたように、主体の問題は処理の困難な問題ではあるが、実際問題としてはコーヘンの所謂、法人意志のような、自我聯関的な主体が存在し、働いている。その間の真相に肉薄して行かなくては、倫理学の問題は突っ込みが足りなくなる。それをつつき始めたのは十九世紀以来の社会学である。尤も、学問上の専門意識の為か、個人のほかに社会

があるという考え方をする弊があつて、その結果、今の問題が又ずれてくる。いつも個人を離れた別の秩序のものをつかまえるという風にずれてきて、個人と全体との聯関が見失われる。しかしタルドは天才的な社会学者であつて、面白い考え方をしている、彼は自分のやる社会学は脳と脳との間の社会学だということを述べている。タルドの根本命題は「社会は模倣である」というのであつて、あらゆる意識の問題が模倣に還元される。例えば欲望は、普通は自我と客体との関係で考えられるが、これは抽象的である。飢餓に対応するものは、新たに探す

自然物などではなくて、既に社会的に決っている食物であつて、飢餓は、パン、米等を食いたいというかたちであらわれる。社会的関係が先で、それより根本的な、自然現象としての飢餓のようなものは、実際にはなくて抽象である。かような社会学者の仕事によつて、主体自体が複雑な聯関構造を持っており、それは意識の問題が起るより先の問題であるということがだんだん明かになつてくる。

マルクスはタルドより少し前の人であるが、そのドイチェ・イデオロギーの中に、言葉と意識の起源を説いた

優れた叙述がある。言葉と意識とは同時に社会的に起るものである。言葉は、交渉する相手がなくては存在しない。意志を通ずる相手がなくては、言葉は、従って意識は起らない。主体の間を関係を結ぶことによつて人間の意識が成立してくる。ロビンソン・クルーソーを出発点とする考え方は根本的な誤謬を犯している、というのであつて、これなどは、十九世紀後半という時代の明白な反映だと考えられる。殊にマルクスが、動物は関係を作ることをしてしない、それをするのは人間のみであると考えているのは、注目に値する点であらう。

こういう風にみてくると、主体を考える時は、個人主体間の交渉関係なり、組織なりを初めから考えなければならなくなる。客体との交渉関係は寧ろそこから出てくると考えねばならない。主体自身の持つ関係なり組織なりを（物を作る際は生産関係を）つきとめる時に、初めて、人間がどういう風に行為しているか、又行為すべきかという問題の根本につきあたるのではないか。それが倫理学の第一に解決すべき問題ではないか。かような立場から過去の哲学を考えると、そういう風に問題をたてていないだけで、そういう問題にたえずつき当って

いることは事実であるが、それを正面から問題にすることは、道徳意識の問題が根強い伝統となっている西洋の倫理学者の立場からは、極めて困難であつたと考えられる。

三

主体はつかまえようとすると、するりと後へ抜ける。人格も亦同様で、主体として働いている人格は、対象として^{また}はつかまらない。しかも我々は自分の前にいる客

的な人が主体であることを、ちゃんと心得て行動している。かような、実践的な動きの中で心得ている事柄が倫理学の問題になる。そして日常の実践の中から、主体の基礎的構造をはっきりつかんでおくと、個々の主体の動きは、又いかに動くべきかは後から明かになってくる。

主体の動きは宗教の問題にもつながる。原始的な宗教に於ては、神は主体に対する客体としての神である。進んだ宗教においても、西方浄土に坐っている仏、沙漠にひよいと現れるヤーウエの神、これ等は何れも客いず体としての神と考えられるが、かようなとらえ方では次第に神

が分らなくなる。そこから神は主体として考えつめられてくる。キリスト教の人格神は主体の背後に、どん底に在る神であり、仏教の涅槃ねはんと云われるものも結局に於て主体の根柢に外ならない。かように絶対者が主体であるにかかわらず、それを主体としてしかつかめないところに、宗教の難しさがある。主体としての絶対者は「空」とも云い現わされるが、それは対象的には實際空なのである。しかし主体的にはそうではない。空は却ってそこから総てが出てくる主体的根柢である。唯識ゆいしきではその道程が説かれている。

主体を飽く迄も主体としてつかむことは、そういう面倒なところともつらなる厄介な問題であるが、人格が問題となると、それは主体でありつつ一方に於て同時に客体として働く面を持つので、つかまえにくいと共に、つかまえる手掛りが与えられている。生きた人間は、客体としてのみみれば、生理学的心理学的にいくらでも細かに扱える。しかしそれが同時に対象化出来ない主体でもあるのである。かように主体が客体にあらわれてくることによって、主体を把握する糸口が与えられる。総じて、主体が自己を客体化することがなければ、主体間の交渉、

交際ということも成立しない。主体が主体でないものに己れをあらわしてこることが、人格の生活に行われてい
る。その点に主体を把握するための通路が与えられてい
る。自然科学は一つの対象をそのものとして追求するが、
客体的なものを通じて主体的なものに迫って行こうとす
るのが、倫理学の方向である。個人的全体的な主体の構
造を組織的段階的にとらえることが可能になる。汝と
なんじ我との関係が、男女関係、家族、村落共同体等々として
把握せられ、その段階の一つとして経済組織の問題が出
てくる。

經濟組織の中心概念は財である。財は經濟的価値を有するものであつて、それを媒介として人倫的合一を作る。ことが經濟組織の目的である。經濟組織は人倫的合一の一つの段階であるが故に、財は決して人格の窮極目的となることは出来ない。

資本主義經濟組織に於ては利潤を絶對的目的とするのが普通であるが、それは本来あるべきものが逆さになつているのである。その点を最初に明白にとらえたのが、ヘーゲルの、欲望の体系という思想である。彼はこの逆さになつていふことを人倫の体系なかで明かにし

た。簡単に考えて見ても、質のよいものを安く作るという資本主義経営のコツは、単に自利のみならず、消費者に対する道徳的奉仕という意味につながっていると思う。つまり資本主義経済組織も人倫的組織としての意味を持っている筈であり、もしそれを失っているならば、ひっくり返して人倫的にしなくてはならぬ。本来の経済組織は人倫的組織であり、財は手段であって目的ではない。

資本主義が進展すると共に、手段としての財力が強くなり、人間の方が財の手段となり、人間が機械の奴隷に

されるところという傾向が生じてくる。こういう状態は、在るべき状態が逆になっているのである。それに対して改革を要求する為には、まさにその在るべき状態に就いての基礎的な把握がなくてはならない。マルクスはこの改革の必然性を、商品の分析によって、全然、物の方から説いているように見えるが、実は主体的聯関が、つまり経済組織が、人倫的組織でなくてはならないことを要求しているのである。この根拠がなくして自由競争を「良心なき商業の自由」などと呼ぶことは出来まい。ブハーリンは自分は理論的にはマテリアリストであるが、実践的

にはイデアリストである、と云った。共産主義も亦財を媒介にして正義を実現するものでなくてはならないであろう。

(昭和二十六年四月)

日本文学電子図書館

私の根本の考

著 者：和辻哲郎

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系 40
筑摩書房

昭和48年2月20日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館